

第四章 精神と宗教

- | | | |
|-------|--------------------------------|-------------|
| 4 - 1 | 精神とは - ドイツ観念論とキリスト教思想 - | 10/5 |
| 4 - 2 | 生の次元論と精神 - 新しい次元の創発性の理論化に向けて - | 10/19 |
| 4 - 3 | 社会システム論とパラドックス - ルーマン - | 11/2, 9, 16 |
| 4 - 4 | カオスと自己組織化 | 11/30, 12/7 |
| 4 - 5 | まとめ | 12/14 |

第四章 精神と宗教4 - 1 精神とは - ドイツ観念論とキリスト教思想 -4 - 2 生の次元論と精神4 - 3 社会システム論とパラドックス
- ルーマン -

1. 社会システム論と宗教論
2. ルーマンの社会システム論と宗教
3. 宗教とパラドックス

1. 社会システム論と宗教論

1. 現代社会学の展開：パーソンズからルーマンへ
2. 前期ルーマンの社会システム論
 - システムと環境（システムの内と外の差異化）、それらを含む世界システムを機能から分析する。或る機能は他の機能によって置き換え可能である
 - システムの複雑性(Komplexität)：システムは現に現実化している状態以外の無数の可能性を有する。多数の要素の選択可能性
 - 複雑性の縮減(Reduktion von Komplexität)：社会システムの中心的機能可能性の選択作用としての意味機能。選択 = 排除
3. 宗教論（『宗教の機能』1977年）
 - ・意味から宗教へ
 - ・宗教：聖なるものという暗号によって、究極的に規定不可能なものを規定可能なものへと変換する機能。人間の経験と社会行為の有意味性の保証

2. ルーマンの社会システム論と宗教(1) 後期ルーマンとハーバーマス論争

1. 意味概念に関して
 - 意味：可能性と現実性との区別を不断に再編し、継続的に可能性を現実化（選択）する。選択によって起こる出来事。複雑性の縮減と保存。
 - 複雑性：要素の組み合わせが全部同時に実現できなくなり、諸要素から現実化されるべき要素の選択が要求されるとき、システムは複雑であると言われる。
 - 複雑性の縮減（一定の構造を有する言語）による複雑性（構造的制約があるからこそ自由に多くの事柄を表現しうる）の増大。

前期ルーマンは、意味概念に関してフッサールに依拠することによって、フッサールと同様にモロノグ的な意味理解に陥っている。

Jürgen Habermas / Niklas Lehman, *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie*,
Frankfurt a.M. 1981, S.171-202

- 2 . 意味とは、可能性の選択（否定を介した）であるとされたが、その選択の正しさは、単独の主体だけでは、保証されない（単独の主体の行う選択はすべて正しい選択となつてします。独裁者）。選択は、他者によるチェックに開かれていなければならない。意味とは他者の視点によって見られることを前提とする。意味は、自我と他者とのコミュニケーション過程にその成立の場を有している。

この主体の操作から独立したコミュニケーション過程は、主題化したのが社会システムである。

(2) コミュニケーションの全体性としての社会システム

3 . 一般システム理論の三段階

- ・システムは多数の部分からなる閉鎖的な全体（部分の総和以上）
- ・システムと環境との区別、システムは環境との交換過程によって維持される
- ・オートポイエーシスのシステム論

4 . オートポイエーシス

マトゥーラとヴァレラによって、生命体に妥当する組織原理として導入(生命システム)

システムは自らの働きによって自身の組織を継続的に産出する

閉鎖性と開放性とは相互補完的な関係にある。オートポイエーシスのシステムは自律的(Autonomie)ではあるが、自足的(Autarkie)ではない

神経システムは、ニューロンの自己関係的なネットワークである

ニューロンの活動は先行するニューロンの活動に対する反作用

脳は閉鎖的な自己参照的システム

脳は感覚器官によって外界と接触するのではない。感覚器官は外界の出来事をニューロンの活動に転換する（内と外には一義的な相関関係はない）

5 . 自己参照性（自己関係・自己準拠） 次元の独立性

閉鎖性に基づく開放性

ティリッヒ：自己同一性・道徳

自己同一性 / 自己変化 / 自己回帰

キルケゴール

6 . 一般化：心的システム、社会システム

心的システムの要素は、思考内容、表象

- ・意識・心は、思考内容から思考内容へ、表象から表象への連鎖
自らの活動を通して表象を継続的に産出して行く

- ・物質的・エネルギー的な下部構造を土台にしている。環境からの寄与なしに自力で存立しているわけではない。しかし、システムの統一性と諸要素は、システム自身が産出する

意識は脳の活動に依存しているが、脳・脳波・脳細胞活動と同一では

ない。脳の活動は思考内容ではない・脳は思考しない。脳は意識の環境である。ニューロンの活動が思考・表象に転換される。

・構造的カップリング(strukuelle Kopplung)：システム間の依存 / 非依存

脳と意識とは別々に働くが互いに依存しあっている

7. 社会の構成要素は人間ではなく、コミュニケーションである。可能なコミュニケーションの全体としての社会。人間は社会システムの環境である。

人間はコミュニケーションできない。コミュニケーションのみがコミュニケーションする。

人間の意識システムは、他の意識システムと直接的に接触しない。

他者の心は直接経験できない。意識内容(思考・表象)がコミュニケーションへ(例えば発話)と転換されることによって、間接的に接触する。

コミュニケーションはそれに参加している人格の意識システムがそれぞれの瞬間に何を考えているかについて情報を与えるものではない。コミュニケーションと意識とが分離しているからこそ、より大きな独立と自由が可能になる。

意識とコミュニケーションとは構造的にカップリングしている。

8. 人間は多くのシステムの複合体(システムではない)

次元論：システムは、先行するシステムの創発的な秩序として生成する(創発性)

人間存在(生)において、こうして生成した諸次元が統合されている

	生命システム	心的システム	社会システム
物質・無機的	有機体・生命	心	精神 歴史

(3) コミュニケーションと観察

9. コミュニケーションの三要素：情報、伝達、理解

コミュニケーションは人格を介して行われる。コミュニケーション・システムは自分自身を行為システムとして理解しており、そのとき、それはある人格に帰属させられている(コミュニケーションは、自らに先行するコミュニケーションをある人格の行為に縮減する、ある人格の行為として処理する。コミュニケーションを伝達行為へ縮減し個々の人格に帰属させる)。

10. 情報・伝達(メディア)・理解

情報の価値は、ほかの事態から際だっていることにあり、だからこそ、情報として選択された。伝達の選択性(どのメディアをいかに使用するかの選択)。ある発話(コミュニケーション)は続く発話においてそれが理解されたことが示されることによって完結する。

コミュニケーション(先行するコミュニケーションを理解しつつ、情報を伝達する)は次のコミュニケーションにおける理解へと接続することで、コミュニケーションとなることは、個々のコミュニケーションの成立とそれを要素とするコミュニケーションのネットの成立とがいわば循環しているということに他ならない。

11. 観察

・理解がうまく達成されない場合(コミュニケーションの過程がよどむとき)、コミュニケーションについてのコミュニケーションが必要になる。コミュニケーションがコミュニケーションの対象となるには、それが伝達者に帰属する行為として捉えられねばな

らない（コミュニケーションが進行する過程では、それは後続のコミュニケーションでの理解と接続しており、それだけで分離されていない。これがコミュニケーションの情報となるには、そのコミュニケーションが過程から分離され、対象化されねばならない）。この分離の操作が、観察である。観察とは、一つのコミュニケーションを他のコミュニケーションより区別し、伝達者に帰属する行為として構成する操作に他ならない。

- ・観察とは、先行するコミュニケーションがどのように理解されたか、どのように理解されることを意図していたかという点から、必要な修正・説明を加えるコミュニケーション。この観察が次のコミュニケーションに接続して行くためには、観察の理解が次のコミュニケーションの中で示されねばならない。

観察という操作は、無限の操作となり、コミュニケーションの過程における意味の生成は、コミュニケーション過程内部では無限遡及することになり決定不可能となる（無限遡及のパラドックス）。自己観察は、「自己／非自己」の区分に基づく、「自己」への指示という形をとるが（「区別と指示」に基づく、ジョージ・スペンサー・ブラウンの操作的論理学）、この指示自体が、先の区別に基づく「自己」を指示しなければならない。

- ・しかし、このような自己観察のパラドックスは、この自己自身においては観察されない（パラドックスにかかわらず、コミュニケーションは滞りなく継続されて行く）。これがパラドックスとして観察されるのは、他者観察においてである。システムにおいて必然的で代替不可能なものが、外部観察者にとっては偶然的に現れる。発話の行為としての意味が確定したものとみなし、その成立根拠を問うときに、パラドックスが発見される。システムの自己観察に内在する限り、システムの操作自体にはパラドックスはなく、またそこにパラドックスを発見する外部観察操作自体が、システムに組み込まれているのである。

（４）宗教とパラドックスの脱パラドックス

12. コミュニケーション過程は、発話者間の相互モニター過程であり、コミュニケーションの意味の最終的確定は、後続の理解になかを継続的に先送りされて行き、絶対的な意味の定点は現れない。

社会システムは全体システムに対して特殊な機能を担っている機能システムを含んでいるが、それぞれの機能システムはコミュニケーションの接続の中でその統一性を維持し再生産している。そして、それぞれの機能システムはその特殊機能に応じて独特の接続様式、独自のメディアを持っている。

13. メディア：言語／マス・メディア（不特定多数の人々にメッセージを伝達する）／

象徴的に一般化されたメディア（権力、真理、貨幣、愛、信仰）

受け手の受容（コミュニケーション上の成果。コミュニケーションの選択的な内容・情報を自らの行動の前提として引き受ける）を促進するように動機付け、拒絶のチャンスを減退させる

メディアは、二項的なコードに基づいて、個々のコミュニケーションを二値的に区分する。選好コード：選好の有価値／無価値の二元化

14. 宗教と信仰コード

- ・宗教的コミュニケーションにおいて成果を保証するメディアは（象徴的に一般化されたメディア）は、信仰である。コミュニケーションの単位としての教会。
- ・機能分化の過程を通して（近代化・世俗化）宗教は個別的時空的に限定された状況から独立し、文脈から自由になる。宗教的システムの自己同一性は、儀礼から信仰（高度に一般化された象徴）に移行し、何が正しい信仰であるかが争点を形成する。
- ・信仰コードは、「内在性 / 超越性」の区別によって機能する。
意味の構築される場としての内在と一切の意味に伴う地平としての超越。
意味とは可能性の選択であり、他の諸可能性との差異化であり、その都度現前されている可能性が逐次引き渡されて行くこと予想している。この可能性と現実性の差異の場（コミュニケーションが接続される場）が内在性であり、この差異の向こう（意味に対する諸可能性の過剰への指示）が超越性である。意味の確定のために、諸可能性の全体を視野に入れようとするとき、見渡した諸可能性がさらなる諸可能性（地平）に取り囲まれていることに気づかざるを得ない。意味の最終確定のための地平はどこまでも到達不可能であり、意味は規定不可能なままである。超越性とは、意味の最終的規定不可能性を指示している。
- ・宗教とは、「内在性 / 超越性」により二項化された選好コードが作用するコミュニケーション様式である。宗教的コミュニケーションが接続して行くということは、この接続自体のなかで、あらゆるコミュニケーションが超越性に対する内在性として観察されていることに他ならない。宗教的コミュニケーションは、規定可能性 / 規定不可能性が同時に現前するという問題に関わっており、超越性が単なる意味の諸可能性の過剰のままにとどまらず、内在性の否定として操作されるためには、超越性は独自の形態（神、霊、道など）という仕方と与えられねばならない。このようにして、宗教は規定不可能な世界を規定可能な世界（システムと環境が構造的に関係づけられている世界）へと転換することなのである。また、この超越性に独自の形態は、暗号と呼ばれたものであり、超越性が暗号化された規定不可能性として一つの選択肢として指示されるとき、コミュニケーションは宗教的となる。

15. 神の存在論証とは何か

第一原因：「モデル + 限定詞 (model + qualifier)」 隠喩・暗号

モデル：目指されるべき事柄に到達するために使用される既知の事象

日常的な「原因」概念は、「原因 - 結果」連鎖における「原因」

「第一」原因に表現に対応するものは経験領域に存在しない

限定詞：「第一」、無限遡及を一挙に行う（＝極限值を取る操作、論理的飛躍）

日常経験とは質的に異なった状況を理解可能にする

Ian T. Ramsey, *Religious Language. An Empirical Placing of Theological Phrases*, London 1957

< 文献 >

1. Niklas Luhman, *Funktion der Religion*, Frankfurt a. M. 1977
（『宗教社会学 宗教の機能』新泉社）

- , *Gesellschaftsstruktur und Semantik. Bd.2*, Frankfurt a.M. 1981
- , Society, Meaning, Religion. Based on Self-Reference, in: *Sociological Analysis* 46, 1985
- , The Autopoiesis of Social System, in: Felix Geyer / Johannes van der Ziuwen (ed.), *Sociocybernetic Padadoxes*, London 1986
- 『システム理論のパラダイム転換』お茶の水書房
- 『自己言及性について』国文社
- 『宗教論』法政大学出版局、など
- 2 . 今田高俊 『自己組織化 社会理論の復活』創文社
 - 3 . 高橋 徹 『意味の歴史社会学 ルーマンの近代ゼマンティック論』世界思想社
 - 4 . 村中知子編 『ルーマン理論の可能性』恒星社厚生閣
 - 5 . クニール/ナセヒ 『ルーマン 社会システム理論』新泉社
 - 6 . 土方 透編 『ルーマン/来るべき知』勁草書房